

国際学術講演会

『ナスカとパルパの地上絵と社会：考古学研究の最前線』

坂井正人

国際学術講演会『ナスカとパルパの地上絵と社会：考古学研究の最前線』(Geoglyphs and Society in Nasca and Palpa: Recent Advances in Archaeological Research.)を、山形大学基盤教育222教室において、2014年2月22日(土)に開催した。

この講演会の目的は、ペルー南海岸のナスカおよびパルパ地域における最新の調査成果に基づき、両地域の社会の実態および地上絵をめぐる研究の最前線を紹介することにある。そこで国立民族学博物館の関雄二教授と山形大学人文学部の坂井正人・松本雄一で、テーマの設定と招待者の人選を行った。招聘したのは、ドイツ国立考古学研究所のマルクス・ラインデル、米国パデュー大学のケヴィン・ボーン、テキサス州立大学のクリスティーナ・コンリーの3名である。全員ペルーで現地調査を精力的に実施している新進気鋭の研究者である。この3名にくわえて、地上絵の保護活動に貢献してきた楠田枝里子氏(司会者、エッセイスト)および人文学部の坂井正人が講演した。総合司会は人文学部の松本雄一で、英語での講演に関しては通訳もおこなった。当日の参加者は152名で、山形大学の学生だけでなく、多数の市民が参加した。

人文学部の北川忠明学部長と国立民族学博物館の関雄二教授の挨拶に続いて、まず、楠田枝里子氏による特別講演「ナスカと私」がおこなわれた。この講演では、ナスカの地上絵の研究で有名な故マリア・ライヘ博士との交流、そして、地上絵を保護するために設立した「日本マリア・ライヘ基金」の活動について説明された。特にマルクス・ラインデルが中心になって設立したパルパ博物館とそこにおける社会教育活動に対する支援について紹介された。

マルクス・ラインデルは“Climate Change and its Impact on Settlements and Geoglyphs in Palpa, South of Peru”(ペルー南部、パルパ地区における気候変動と居住地・地上絵に対する影響)と題して、パルパ地区でこれまで実施してきた地上絵調査、古環境調査、遺跡の分布調査を紹介するとともに、当時の儀礼活動の特徴および環境と人間の関係について論じた。

クリスティーナ・コンリーは“Two Thousand Years of Ritual Practices and Religion in the Nasca region of Peru”(ナスカの儀礼と宗教：2千年間の変化)と題して、埋葬をめぐる儀礼と宗教について論じた。埋葬方法、副葬品、骨などの分析を通して、社会体制の変化に伴う儀礼や宗教のあり方を通時的に議論した。

ケヴィン・ボーンは“Nasca Society from the Periphery: New Perspectives from Villages and Mines”(周縁からみたナスカ社会：村落と鉱山からの新たな視点)と題して、多彩色土器の製作と流通の中心であった大神殿カワチと集落の関わりに焦点を当てながら、当時の集落および鉱山の特徴について議論した。

坂井正人は「ナスカの地上絵と社会変化」と題して、山形大学がナスカ台地において実施してきた地上絵研究を紹介するとともに、地上絵を制作した社会のあり方について議論した。

この国際学術講演会は山形大学人文学部が主催し、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(代表：青山和夫)、および頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワー

国際学術講演会『ナスカとパルパの地上絵と社会：考古学研究の最前線』（坂井 正人）

ク構築」（代表：坂井正人）が共催し、古代アメリカ学会が協力して開催された。